

鳩紫の贖罪

常世さん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

役目を終えた人でなし。これは、そんな彼の蛇足の様な物語

【鳩紫の雑感】のその後の話です。というか、こちらを書きたいからこそ、下地を書いた訳です。

読まずとも問題はあまり無いかと

目次

3	2	1	始まり
19	13	5	1

始まり

鳩紫かいつぶりむらさぎは、大罪人である。これは、自身が称すると共に、彼を知る者は同意するように頷く事だろう。

だがしかし、同時に運命の被害者でもあった。

そもそも、鳩紫という名前は偽名。その正体は、千年以上を生きる大生部多おおおへのおおと呼ばれる、日本書紀にも記されたとある宗教の教祖だった。

だが、それだけではない。彼には、所謂ところの前世と呼ばれる知識を有していた。

彼は、その物語の中で自身が悪役となる事を知っていた。一度はその運命に抗おうとしたが、その試みは失敗。彼なりに物語の終結へと向かうべく行動することを強いられることになる。

結果、彼は死亡した。その魂は、信仰していた神と共に、常世へと送られたはずだった。

だが、

「こ、こは……？」

気付けば、紫は街の中に立っていた。

格好は、鳩紫の格好としてよく来ていた藤色の着物に黒い袴、更に南蛮渡来の厚みのある襟のある外套。

切支丹のような格好だが、生憎と彼は宗教にそこまで入れ込んではいない。教祖だろうと言われても、それは彼の意図したものではなかった。

紫は、周囲を見渡して首を傾げた。

まるで南蛮の街並みだが、しかし同時に違和感もある。

それは、周囲を行く人種。自身に向けられる視線に關しても気になるが、何より彼らはただの人間ばかりではなかった。

(蟲人……じゃないな。いや、そもそも何で私は生きている?)

顎を擦っていた右手をさりげなく動かして、首筋を指先で撫でながら脈を確認すれば確かな振動が感じられた。

だが、鳩紫は確かに死んだはずなのだ。その体に分不相応の力を宿

して崩壊した筈なのだ。

にもかかわらず、自分は生きている。それどころか、無くなった筈の力すら自分の中に感じていた。

（『常世の蟲』が私の魂を放り出した？……いや、あの方は約束を反故にはしない。それも、主人公が相手なら猶更……ッ！）

周りなど気にも留めず思考に耽っていた紫は、不意に違和感を覚えて辺りを見渡した。

いつの間にか、世界から色が失われていた。

それだけではない。音も消え去り、更には道行く人々はそのままの姿勢と表情で固まっている。

「何が……」

『それは、我が説明するでしょう』

莊嚴の声と共に、紫の背後に気配が一つ現れる。

反射的に振り返ってその気配の姿を確認し、彼はその目を大きく見開いた。

「『常世の蟲』……」

『久しい……とは、言えぬか。時間も無い故、手短に済ますとしよう』
「……待ってください」

思わぬ相手との再会に、しかし紫は頭を抱えた。

「貴方は、私の魂をもって常世へと向かったはず……何より、恨んでおられるでしょう？」

後半部分が、本当に聞きたい部分。

正直な話をすれば、紫はその生い立ちから自分の全く知らな場所に飛ばされたとしても平気だったりする。現代社会から、古代日本へと吹っ飛ばされればその辺りに凶太さも養われるというもの。

だが、彼も人だ。自分を恨んでいるであろう、ましてや神を相手に聞かない訳にはいかなかった。

果たして、

『……恨んでは、いない』

「ッ、ですが……！」

『ただ……そうだな。私の軽率な行動が、お主を追い込んでしまっ

た事は、悔やんでいるか……………」

思わぬ言葉に、紫の目が見開かれた。同時に、胸の内が渦を巻く。
「……ッ！私が、私たちが居なければ！貴方はあんな思いをする事はなかったんですよ！ましてや、私は貴方からの信頼を裏切り！貴方が最も大切に思っていた奈阿姫を傷つける事すらした！なのに、どうして——」

『全てを見たからだ』

慟哭の様な懺悔は、しかし静かな言葉に止められる。

『あの刀、塵外刀であったか。あの刀に吸収されてから、我とあの中に居た者たちは、お主と月島仁兵衛のやり取りを見ていた』

「なっ……………!?ど、どういう……………」

『お主と我には、奈阿程ではないが繋がりがあある。力の大半を失っていたとはいえ、その繋がりを辿る程度ならば可能だ』

「……………ならば、分かる筈です。私は、私欲のためにあらゆる全てを欺き、利用し、使い捨ててきた」

俯く紫。握った拳からは血が滴る。

悲劇のヒーローを気取る気はない。無いが、しかし後悔を一切抱えていない訳では無いのだ。それどころか、彼の大生部多^鳩としての人生は、後悔ばかりの人生だった。

だからこそ、彼は恨んでほしい、憎んでほしい。そして、許されなくなかった。

『——それでも、お主の幸せを願った者達が居る』

ハッと紫は顔を上げた。

蝶の踊る真っ直ぐな視線が彼を貫く。

『大罪なのだろう、大悪なのだろう。お主に恨み言を吐いた者も居た——……………それでも、許しを口にしたのだ』

「ッ……………」

『故に、我はお主をこの世界へと飛ばした。この世界に、お主を知る者は存在しない。蟲も、蟲人も存在しない』

「……………ここで、何を成せと?」

『それは、お主次第だ。だが、彼らが望むはお主の人生を送る事だ』

「私の……？」

『好きに、良きよ。善行を成すも、良し。悪行を成すも、良し。全てが、お主の自由だ』

目を丸くして、紫は『常世の蟲』を見た。

凡そ千年以上、無縁だった言葉だ。

唾然とする紫だが、時計の針は進む。そもそも、時間は限られているのだ。

『そろそろ、時間だ多よおほ。お主には、私の力が息づいている。好きに使うと良い』

「ッ、『常世の蟲』様っ……！」

『これは、我からの罪滅ぼしだ……すまない、多よ』

それだけ言って、元々薄かった常世の蟲の姿は更に薄れていく。

もう引き留められない。触れる事すらできない。そして、二度と会えないかもしれない。

だからこそ、紫の口は動いていた。

「『常世の蟲』様！貴方は、誰も幸せに出来ないと言った！だが！私
は、私たちは！あの日、あの時、あの瞬間！確かに、幸せだった!!!」

言葉が届いたのかは、分からない。

だが、『常世の蟲』は確かにその表情を僅かにだが緩ませていた。
こうして、鴉紫の命の続きは始まった。

舞台は、箱庭。修羅神仏の跋扈する、超常世界。

人でなしは、何を成せるのか。

箱庭二一〇五三八〇外門。ペリベット通り。

石畳を踏みながら、鳩紫は特に理由も無く街並みを散策していた。
 “常世の蟲”との再会を経て、その内心の靄は晴れてはいないが少しはマシになった。とくれば、次に必要になるのは情報。

周りの道行く人々に声を掛けるといふ方法もあるが、紫の場合はその前に自分の中で疑問の明確化を図っていた。

具体的には、この街の観察。

（異種族、と言うべきか。頭に耳があり、臀部にしっぽ。そもそも、人型をしていても肌の質感が爬虫類の様な場合もある、と）

怪しくない程度に視線を走らせながら、紫は内心で感嘆していた。
 巨大蟲が跋扈する超常の世界で生きてきた彼だが、ここまでの人種の多様性は無かった。蟲人に関しても特徴的な部分はあれども基本は日本人ばかり。

その点で言えば、肌の色のみならず通常人間にはついていないだろう付属品耳や尻尾などが付いているというのは目新しい。

街並みに関しても、江戸の木造と瓦葺の建物とは違って石造りが多い。地面も、石畳と称したが規則正しいレンガと言うよりは切り出した自然石を組み合わせた様な見た目だ。

石畳と言うのは、存外整備というものに手が掛かる。アスファルトなどと比べて、石と言うのは砕けてしまうからだ。

しかし、草履で歩く道には突っかかるような欠けの一つも無かった。

（文化の発展度合いは、江戸の比じゃない。そもそも、様式が違う。にも拘らず言語は通じる、読める、と）

不思議なものだ。同時に、千年以上の年月を生きてきて、ほんの少し胸が高鳴っていたりもする。

だが、そんな紫の心に冷や水をぶっかける光景が飛び込んできた。

「……………ん？」

それは、街の周囲の壁。その一部に設けられた出入り可能なゲート

部分近く。

よくよく目を凝らせば、子供たちの集団とそれから、そんな子供たちを取り囲むガラの悪い連中がそこに居た。

その姿を認識し、紫の目がキュツと細まる。同時に、常に浮かべていた柔和な、しかしどこか人を食った様な笑みを浮かべると徐にその集団へと足を向けた。

近付けば、自然と状況も見えてくる。

どうやら子供たちは水の入ったバケツを守っているようで、そこにチンピラ共が絡んでいるらしい。

「おいおい、何だよその目は」

「……………」

「〃名無しノリーネーム〃の分際で、随分と躰がなつてねえじゃねえか？」

ニヤニヤと見下ろすリーダー格なのだろう、赤毛のチンピラが嘲笑えば、その取り巻きも同じように嘲笑を浮かべる。

同時に、その周りの誰も子供たちを助けようとしなない。

チンピラが十人単位の徒党を組んでいるというのと、それから子供たちの立場の問題があつての事だ。

「なあ、何とか言えよ、オイ」

上から見下ろすように凄むチンピラ。

彼らがこうして絡んでいるのは、偏にストレスの発散だった。

強者には阿る、弱者には暴力を。

この点で言えば、子供たちの方は正しい。言葉を交わさず、自分たちの財産を守る様に動くだけだ。変に言葉を返せば、どうなるかわからない。

ただ、この手の輩は相手が反撃してこないと調子に乗る。

「目障りなんだよな、オマエ等。その癖、〃ウサギ〃手元においてよオ。寄生虫共がよオ」

「ツ……………」

「お、泣く？泣いちゃうか？良いぜ、泣けよオ。泣けば、ウサギが助けに来るかもなあ？ギャハハハ！」

嘯くチンピラだが、今この街に件の〃ウサギ〃が居ない事は知って

いるのだ。その辺りも、何とというか小物。

だからこそだろう。気が大きくなつたチンピラが子供の一人に右手を伸ばしていた。

その指先が、胸ぐらを――

「――はい、そこまで」

掴もうとしたチンピラの手首辺りをまた別の手が掴んで止めていた。

反射的に凄んで見上げれば、そこに居たのは藤色の着物に黒い袴の柔らかな笑みを浮かべた一人の青年。

優男だ。少なくとも、荒事とは無縁そうな、うらなり青瓢箪。

「んだ、テメエ」

「ただの通行人ですよ」

凄んで問えば、笑みを浮かべたままに静かな言葉が返ってくる。

どこか余裕を感じさせるその態度に、元々血の気の多いチンピラの瞳孔が細まり、同時に剣呑な気配が増す。

「だつたらなんだ？ヒーロー気取りの痛い奴ってか？第一、このガキどもの味方を何です。こんな『名無し』^{ノーネーム}のクズ共を」

「さて。生憎と、私はこの街に來たばかりで文化に疎い。貴方が言う蔑称についても存じ上げません」

「ハッ！新入りかよ……なら、覚えとけ。こいつら『ノーネーム』の連中は、この箱庭の世界で、名前も旗印も無いクズ共なのさ！」

再び嘲うチンピラに、取り巻きも続いて嗤う。

青年、紫はチンピラの腕を掴んだままに、内心で成程と頷いていた。
(この街……箱庭、か。この箱庭では、名無しと言うのは侮蔑の意味がある上に周りもそれを黙認している、と)

どの世界にも、蔑称は存在する。それに関しては、紫も糾弾する気はない。社会生活というものが存在する限りついて回る問題であるからだ。

もつとも、それを受け入れるかどうかは本人次第なのだが。

一頻り嗤ったチンピラは、少し息を整えて腕を見る。

「おい、いい加減放せよ」

「はい？」

「その手……ッ！は、放せて……！」

握られている手を示しチンピラの表情が変わる。

「どうかしましたか？随分と、顔色が悪いようですが……！」

「て、めえのせいだろうか……！は、放せ……っ！」

「さて、何の事でしようかね」

紫が放す気が無いと分かったのか、チンピラは必死に彼の手に掴まれている己の右手首を解放させようと藻掻く。

その異変にようやく気付いたのか、周りの取り巻きが動くこうとするが、

「……」

「「ッ……!?!」」

一瞥してきた紫によってその足はその場に縫い止められたように動けない。

まるで、巨大な蟲の化物に見られてしまったかのような恐怖が、その足を前へと踏み出させる事躊躇わせた。

動けない彼らを尻目に、紫はチンピラの手首を握った右手を上へと持ち上げる。自然と、腕に引かれてチンピラの体も起き上がった。

「あ、ぐっ……!?!」

「私は、貴方の言うように新参者です。この街の、箱庭でしたか。箱庭に存在する価値観など知りません。ですが——」

グイツと紫はそこでチンピラの目を覗き込む様に、顔を近づけた。

「私自身の価値観に照らし合わせれば、無力な子供に凄んで、剩え暴力を加えようとする者は、間違いなく“悪”です。生憎と、私はそんな“悪”を糾弾できるような立場ではありませんが……好きに生きろと言われましてね」

「はあ……!?!」

「君たちがどこの誰だろうと、関係ありません。私は私の、基準で動かせてもらいます」

言うなり、紫は右腕を振り被り、チンピラを文字通りぶん投げる。

その先は、噴水だ。派手な水しぶきと共に、その赤毛が水面に消え

る。

衝撃映像に我に返った取り巻きたちは、慌てて噴水の方へと走って行ってしまった。

啞然とする周囲を一睨みして、紫はスルリと子供たちの方へと向き直り、膝を折ってしやがみ込む。

「すみません。つつい、頭に血が昇ってしまったていた様です。君たち、怪我はありませんか？」

「あ、えっと……」

「助けてくれてありがとう兄ちゃん！」

「助けた何て、とんでもない。私はただ、気に入らないから八つ当たりをしたに過ぎませんよ」

「でも！本当に助かりました！お水、持っていないといけないし……」

「そーそー！アイツらにバケツ蹴られたらまた汲みにいかないといけないし」

「えーやだー」

「でもでも、黒うさの姉ちゃんにお風呂は入ってほしいだろ？」

「疲れたー」

わいわいがやがやと口々に言う子供たちに、紫はその表情を緩める。

懐かしい、と思ってしまう。同時に、そんな資格は無いだろうと、心の隅が嘯く。

緊張感が抜けてくるが、それも長くは続かない。

「テメエ!!」

鋭い声が飛ぶ。振り返れば、怒髪衝天と言わんばかりの形相でびしょ濡れの赤毛のチンピラが紫の事を睨みつけていた。

「おや、まだ居たんですか」

「ふざけやがって……！テメエ、『バンデイローグ』に喧嘩売って、ただで済むと思ってるのか!？」

「さて……どうでしょうかね」

「この……」

「ただ、子供に絡んで悦に浸るような人間を恐れる、と言う方が土台無理な話では？」

顔を赤くして憤怒に塗れるチンピラに、紫は余裕の態度を崩すことは無い。さりげなく子供たちを庇っているが、自分にヘイトが向く分には欠片も気にしていなかった。

そもそも、周りのチンピラは揃いも揃って三流揃い。赤毛は精々二流程度。紫の見立てでしかないが、仮に袋叩きに遭ったとしても余裕で全員伸す事が出来るだろう。寧ろ、相手から手を出してくれば、反撃の理由にもなる。

チンピラの方も知能は低いが、単なる馬鹿ではないらしく歯噛みはすれども襲い掛かるような愚を犯そうとはしなかった。歯が砕けそうなほどに歯軋りしているが。

「その面、覚えたからな……！後悔させてやるよ……!!」

「そうですか。では、サヨウナラ赤毛猿君」

ビキリ、とチンピラの蟀谷に青筋が浮かぶか、片手で軽々と人一人投げ飛ばすような相手に挑みかかるような度胸は無いらしい。

唾を吐き去っていく背中。

完全に見えなくなった所で、改めて紫は子供たちへと向き直って膝を付いた。

「重ね重ねすみません。私も、もう行きますが皆さん気を付けてくださいね」

「行っちゃうの？」

「兄ちゃん、外から来たんだろ？黒うさの姉ちゃんにお願いして、ホームに来る？」

「うんうん！それが良い！」

「兄ちゃんあそぼー」

「疲れたー」

きやいきやいと騒ぐ子供たち。紫は困った様に眉根を寄せる。

「ここら君たち？そう簡単に、見ず知らずの人間を家に招くような真似をするんじゃないやありません。家の人も困ってしまいますし、迷惑になりますからね？」

「ええー」

「不満を漏らさない。その君たちのお姉さんも、いきなり見ず知らずの、それも大の男を連れて来れば困ってしまいます。ここは大人しくお家に――」

「――その必要はございません！」

再度帰宅を促す紫だったが、そんな彼へと横合いから高い声が響く。

そちらを見れば、十代半ば程の少女が一人、人混みをかき分けて現れていた。

中々奇抜な格好ではあるが、紫としては特に気になるようなものでもない。どちらかと言うと興味を引いたのは、その頭か。

ウサミミ。遠目からでも毛並みの良さが分かる耳がピンと二つ立っていた。

「君は……」

「私は、黒ウサギと申します。この度は、私のコミュニティの同士達を助けていただき感謝します」

深々と頭を下げる黒ウサギに、紫は手を振った。

「いえいえ、気にしないでください………ああ、成程。君が、この子たちに言っていたお姉さんですね」

「ええっと、そうに……います」

「では、丁度良かった。この子たちも帰る所ですし、私もお暇すると思いますよ」

やんわりと、自身の外套掴んだ小さな手を外しながら紫は立ち上がる。

偶々手を出してしまったが、保護者が居るのなら問題ないだろう、と。ついでに、黒ウサギ自身もある程度戦えることを彼は見抜いていた。

だが、

「お待ちいただけますか？」

「……まだ、何か？」

黒ウサギが、踵を返そうとした彼を引き留める。

「実は、黒ウサギの素敵耳はとても高性能なのです。それで、少しお話を耳にしまして」

「はあ……」

「子供たちも世話になった事ですし、どうでしょうか。我らがホームを一晚の宿としてみては、如何ですか？」

ある意味では予想通りの言葉に、紫は頭を搔く。

確かに、宿は必要だ。生憎と今の彼は、無一文。伝手なども特になく、最悪適当な場所で野宿する事も考えていた。

誘いは、正直有り難い。が、ソレはソレとしてのこのこ付いていくリスクもある。

頭の中で算盤を弾いていた紫。その視線が、不意に袴を引かれた事で止まり、視線が下へと向けられた。

「……………」

無垢な瞳が見上げてくる。助けたからか、どうにも懐かれてしまったらしい。

一つ息を吐き出して、紫は徐に先程から疲れたと連呼する小柄な子を左腕で抱き上げていた。

「……………では、ご厚意に甘えさせてもらいましょう。そちらの水のバケツを取ってもらえますか？」

折れた紫は、せめてもの手伝いとしてそう切り出すのだった。

黒ウサギがその場に居合わせたのは、本当に偶然だった。

二年前、とある事情によつて零細コミュニティへと転げ落ちた自分たちの居場所。

彼女は、自身の特権を生かして生きる糧を稼いでいたが、如何せん百人を超える子供たちを養い続けるには足りない。家計は常に火の車だった。

その日も、黒ウサギは稼業を熟して帰路についていた。予定よりも早く帰れたのは、相手側がこちらの事情を汲んでくれたから。

急いで帰ろうと足を回して暫く。ペリベット通りへと差し掛かったところで、彼女の高性能なウサミミが聞き慣れた声を掬い上げる。同時に、ここ最近幅を利かせている柄の悪い輩の声も。

慌てて人混みをかき分けて向かえば、そこに居たのは自身の同士達であり同時に、庇護対象でもある子供たちの姿。

そして、子供たちを背に庇つてチンピラと相對する和装の青年。

黒ウサギの知らない男性だ。というか、この一帯では見た事が無い。

ただ、悪い気配はなかった。寧ろ、周りが見て見ぬふりをする子供たちを庇っているだけで、既に好感度が僅かに上がっている辺り、彼女たちの境遇が伺い知れるというもの。

程なくして絡んでいたチンピラへと、毒舌を投げて撃退した青年は子供たちへと振り返つてしやがみ込み何やら話し込んでいる。

どうやら子供たちが彼を引き留めようとしている、と聞き取り黒ウサギの足は前へと進んでいた。

*

自身の周囲を駆け回り、更にはよじ登ってくる小さい子に手を添えながら鳩かいつぶりむらさぎ紫は柔らかな笑みを浮かべていた。

その隣では連れだつて歩く黒ウサギが申し訳なきような表情で、眉を下げている。

何より目を引くのが、二人の後方。積み上げられたバケツが微動だにする事無く、黒い六角形の板の様なものに乗せられ、浮いて後をついてくるのだ。

持ち運ぶバケツから解放されて、子供たちは元気に駆け回りながら紫を遊具にしている。

「ごらー皆さま、少しはしやぎ過ぎですー！」

窘める黒ウサギ。だが、そんな彼女を止めるのは、あろうことか遊具にされている紫の方だった。

「ふふつ、気にしないでください黒ウサギ君。私は気にしませんから」「ですが……恩人への態度では………」

「そこを曲げてください。私としても、一夜の宿を借りられるだけで十分ですから。それに、こうして元氣印の子供たちと関わるところよりも元氣を貰えますからね」

そう言つて微笑みながら、紫は登れない、と膨れる子供を大きく持ち上げ抱き上げた。

余談だが、彼の身長は黒ウサギよりも頭一つ分以上高い。ウサミミは抜きにして。

キャラキャラと笑う子供に、他の子たちも抱っこを求めてくる。

「はいはい、順番ですよ」

紫は手慣れた様子で抱え上げていた子供を、何処から呼び出したのか浮かせた六角形の漆黒の板に乗せると次の子を抱き上げる。

ゆつたりとした着物姿である事から分かりにくいだが、彼は存外鍛えている。パワフルな子供たち相手にも余裕が感じられた。

そんな姿を横目に、黒ウサギは考える。

(もしも、紫さんが私たちのコミュニテイに………いえ、ダメですね。御話を聞く限り、今日箱庭に召喚されたばかりの様ですし

……)

交わした会話もそれ程多くは無いが、しかし彼女から見て紫の為人は何となくつかめた気がする。

穏やかな善人。それが表面上である可能性も無きにしも非ずだが、それならば態々子供たちを助けるためにチンピラに絡むことは無い。

嘘を吐くにしてもメリットが無い。黒ウサギを狙っていたとしても、彼女は一度として紫からそう言う視線を受けてはいなかった。

女性というのは視線に敏感だ。加えて、黒ウサギは美少女で、同時に垂涎ものの肢体をしており、尚且つ露出の、フェティシズムが刺激されるような格好をしている。

だが、胸元にも、足にも視線を向けず、黒ウサギと話している時は真つすぐに目を見て会話していた。

黙り込んだ黒ウサギに、悩みがあるのかと考える紫だったが声を掛けるような事はしなかった。代わりに、子供たちの相手が続ける。

そして、辿り着くのは門の前。

「あの、紫さん」

「はいなんでしょう？」

「その……私たちがお連れしましたが、紫さんがお断りをされると言うなら我々も止めませんので」

唐突にそんな事を言う黒ウサギに、紫は首を傾げた。

先の通り、彼としては一夜の宿が借りれるのならそれで良い。最悪軒の下にでも放り込まれても一切文句は言わなかっただろう。

そう本心を伝えれば、黒ウサギも腹を括ったのか門が開かれた。

その先に広がる光景に、紫の目が見開かれる。

「こ、れは……」

風化された街並みがそこに広がっていた。

整備されていたであろう道には砂が降り積もり、崩れた家屋の木材などには腐蝕を通り越して風化してしまっている。金属の柱や釘などは錆び切って風が服だけでも軋み、抜ける風は何処か埃の様なニオイを鼻へと届けてきた。

抱えていた子供を下して、紫は徐に家屋の一つへと歩を進めた。

指で木材を摘まめば、割れるのではなく崩れてしまう。

「……………いったい、何が？」

「……事の始まりは、二年前にあります」

「二年、前……………」

この光景が？と紫の態度が問う。

二年どころか、数百年単位で年月が経過しましたと言われても納得できるような惨状が、この街並みには広がっているのだ。

「まずは、本拠へ。そちらで、この箱庭の世界について詳しく説明させていただきます」

「え？あ、ああ……………そう、ですね」

面食らっていた紫は、子供たちに手を引かれ風化した街並みへと足を踏み入れる。

そして知る事になるこの世界の残酷さを。

*

「『ノーネーム』本拠の宛がわれた部屋にて、紫は一人ため息を吐いていた。

「異世界、箱庭、ギフトゲーム……………そして、魔王」

黒ウサギと、それからもう一人居たこのコミュニティの代表である少年からの説明を受けて彼は考える。

元の世界でも、地獄の様な場所ではあった。

人の命など、紙切れの様に軽く。己の命一つ守る事すら難しい。

奪ってきた側である彼としては、自分の命が脅かされる事にはそれほど関心はない。寧ろ、惨たらしく死ぬべきだろう、と考えてすらいる。

逸れた思考を頭を振って戻して、再び考えるのは今晚世話になっているコミュニティの事。

「『ノーネーム』、その他大勢か……………」

名も無く、旗印も無く、主力に至っても二人のみで、残りの百二十人は全て子供。この二年間で一人も餓死した者を出さなかっただけ立派なものだ。

端的に言うと、紫は彼らの現状に同情していた。安っぽい憐憫を覚えていた。

かといって、彼に何が出来るのか。

一つ補足をする、今の鳩紫という男は、側こそ人間だがその中身は人類とは隔絶した存在に成り果てている。

具体的には、「常世神」。そもそも、「常世の蟲」と呼ばれた存在は、人々の願いによって召喚された神であるのだから。

今の紫は、この常世神とイコールで結ぶことが出来る。もう少し、その繋がりには面倒なものではあるが、とにかく神同然だった。

元の世界ならば、あらゆる全てをそれこそ星ごと滅ぼす事が出来るだろう力を持つ。

だがしかし、ここは巨大蟲ではなく、「修羅神仏」や「悪魔」などの超常の存在が跋扈する箱庭の世界。

如何に神と同じ力を振るおうとも、それで全ての障害を排除できると楽観視できるほど、紫は楽天的ではなかった。

何より、「魔王」という存在。

(時間に干渉できるのなら……)

窓の外から眺めた風化した風景。僅か二年前の襲撃であるにもかかわらず、数百年規模で時が進んでしまったかのような世界。

現状の、紫の寿命は彼自身も分からない。一応千年以上生きてきたが、そこから先どれだけ生きていられるか。

悶々と考えながら、ふと目を閉じる。

思い出すのは、昼間の子供たちの事。

情を抱いてしまった以上、見捨てることはあまりにも後味が悪すぎた。だが、同時に罪悪感がそのもう一步を阻んでいる。

どの面下げて、子供たちを守りたいなど考えているのか。そんな冷めた頭の片隅で、誰かが嗤う。

忘れない事が、償いだ。例えばこれから千年、万年生き続ける事に

なつたとしても、彼はその手に掛けた命を、感触を忘れるつもりはない。

深く沈んでいく意識。不意に鼓膜を、幻聴が打つ。

—— 『先生、少しは自由に生きたら？』

ハツとして目を開けるが、そこに広がるのは借り受けた部屋だけ。

しかし、その声の主に関して紫には思い当たる節があった。

「……………君は、相変わらずですね——空君」

一つのキツカケを作った一人の少女。病弱だった彼女を忘れた事は一度も無い。

都合の良い夢だったのかもしれないが、それでもほんの少しだけ紫の胸の内に渦巻いていた気持ちの靄が薄らいだような気がした。

「次に聞こえる時には、恨み言の一つや二つ投げてくれると、良いんですけどね」

記憶の中の笑顔を思い出しながら、紫は呟いて天井を見上げるのだった。

日が昇って朝が来る。それはここ、箱庭の世界でも変わらない。

「リリ君。こちらはこの味付けで大丈夫ですか？」

「失礼します！……はい！とつても美味しいです！」

満面の笑みで頷く二つの尾を持つ狐の少女を見下ろして、
鴉かいつぶりむらさぎ 紫
は笑みを返した。

常に着ていた南蛮渡来の外套を脱ぎ、襷掛けをした彼は狐の少女、リリを伴って厨に立っている所。

因みに時刻は、朝の六時前後。まだまだ、朝としては早い時間帯だ。

二人が並んで朝食の準備をしているのは、何も特別な事があつてのものではない。

ただ、紫が朝の探索と本拠の中を散策していた際に出会ってそのまま。

「それにしても、紫様はお料理をされるんですね」

「ええ。と言っても、手慰みの様なものですよ。それほど、熱意を持って取り組んでいた訳ではありませんから」

スープの入った鍋をゆつくりと混ぜながら、紫は笑った。

付け加えると、スープにしたのは彼の提案だったりする。

温かな汁物は煮込めば具材も柔らかくなり、尚且つスープ自体にも具材の栄養価が溶け出しており飲むだけでも栄養摂取がある程度可能。

何より、零細コミュニケーションである「ノーネーム」にしてみれば水もそうだが食材も貴重品。余すことなく使うならば、どうしても丸々食べられるようにする必要があつた。スープの水分は、食材の分と元の水の分で1：3といった所か。

仄かに塩気の利いた優しい味わいのスープが出来上がった頃、厨に繋がる廊下の方から足音が近づいてくる。

「おはようございます、リリ……つと、紫さん!？」

「あ、おはよう黒ウサギのお姉ちゃん!」

「おはようございます、黒ウサギ君。朝食の準備は出来ていますよ」

「む、紫さんがお作りになられたのですか？」

「リリ君の手伝いをしていただけですよ」

「お姉ちゃん！紫さんって、とつても手際が良いんだよ！」

こうやって、と嬉々として紫の手際を表現するリリ。

微笑ましいその姿を横目に、紫も襷を解いて近くの棚に置いていた外套を羽織り直した。

「さて、と、黒ウサギ君」

「は、はい。何で御座いましょう？」

「朝食の後で良いので、少し時間をいただけますか？出来れば、ジン君も一緒に」

「そ、それは構いませんが……紫さんはどちらに行かれるんですか？」

「私は、少しやる事があるので席を外します。あ、汁物に関しては全て食べてもらって大丈夫です。私の分は、無理に残すようなことはしないように。良いですね？」

それだけ言うと、彼は颯爽と厨を出て行ってしまった。

その背中を見送った黒ウサギとリリは顔を見合わせる。

「リリ、紫さんは何かおっしゃっていましたか？」

「ううん、何にも」

「そうですか……」

どんな用事なのか気になる所だが、その前に黒ウサギは寸胴鍋に乗せられていた蓋へと手を伸ばす。

蓋を開ければ、湯気が昇り同時に食材の煮込まれたいい香りが、黒ウサギの鼻腔を擽った。

思わずゴクリと喉が鳴る。

「こ、これをリリと紫さんが？」

「うんースープなら、栄養を余さず取れるからって」

リリの言葉を受けて、お玉で具材の一つを掬えばほろりと崩れる程度には柔らかく煮込まれている。

これならば小さな子供でもスプーン一つで食べきれだろう。

至れり尽くせりの朝の一品。準備を始めながら、心中で黒ウサギは感謝を伝えるのだった。

*

“ノーネーム”居住区格。

風化している場所ではあるが、一定の広さがあるそこで手を後ろで緩く組んで空を見上げる紫は人を待っていた。

「紫さん」

そんな背中に掛けられるのは、声変わりしていない少年の高い声。

紫が振り返れば、だぼだぼのローブを着た少年と、それから少年に続くようにやって来た黒ウサギの姿があった。

「おはようございます、ジン君。すみません、態々呼び出してしまつて」

「いえ、それは良いんですけど……あ、朝ご飯ありがとうございます」

「それは良かった……と言っても、調理したのはこのコミュニティの食材ですから、お礼は言わずとも良いんですがね」

微笑を浮かべる紫に、ジンⅡラツセルは何処かむず痒い様な、落ち着かない感覚を覚えていた。

純粋な善意で、尚且つ大人な相手と言うのはここ二年でかなり減った。親切にしてくれる相手もいるが、大半は“ノーネーム”に対して一種の差別意識を持っている。

だからこそ、

(……………いえ)

そこで首を振る。決めるのは、紫だ。

改めて目の前の青年へと目を向ければ、穏やかな笑みのままに組んでいた両手を放して下ろしている。

「実は、折り入ってお願いがあつて今回は時間を作ってもらつたんです」

「お願い、でしょうか？」

「はい。単刀直入に言えば、私をこのコミュニティに在籍させてほしいんです」

「え……」

思わぬ申し出に、二人は固まる。

昨日から考えていた事を、まさか相手の方から切り出されるとは思ってもみなかった。

だが、返事をする前に紫は制止をするように右手を前に突き出していた。

「待つてください。このままだと、私は君たちの人材不足に付け込んで取り入る害虫になってしまいます」

「え、いや……僕らは別にそんな事は……」

「ま、聞いてください。私自身隠し通すの不義理だとは思っていません。それにここは、修羅神仏が跋扈する土地だという話。力を持っている者は、ある程度喧伝する事も必要でしょう？」

「ッ……この気配は……」

黒ウサギが気付く。

目の前に居る青年の気配が変化していた。馴染みがあり、同時にただその場に居るだけでも分かる力の奔流。

「——つと、まあこういう事なんですよね」

鮮やかな四枚二対の巨大な蝶の翅を背負った紫は曖昧に笑う。

これは紫の判断だった。というか、世話になるというのに長々と力を隠し続けるなど出来るはずないと考えたのだ。

何より、いざという時そつなく助けようと思うのなら、力の秘匿は寧ろネック。

目の前の光景に白目を剥くジン。息のを呑む黒ウサギ。

「む、紫さん……いい、いえ！紫様は、し、神霊なのですか？」

「様付けは、やめてください。私は単なる人でなしでしかないのです……そうですね、神霊とは少し違います。神の力を振るえますが……まあ、亡霊、と呼ぶ方が正しいかと」

「ほ、亡霊……では、人間ではない、と？」

「うーん……私の年齢が凡そ、千と百年少し、といった所なんです

よね。人、と名乗るにはいささか歳を重ねすぎてまして」

苦笑いを浮かべて頭を掻く紫に、ジンも黒ウサギもあんどりと口を開けてしまう。

ただ、この言葉に嘘はない。彼は、大生部多鴉紫という男は、日本書紀に記されている様な存在なのだから。

しばらく間をおいて、大きなシヨツクの波が引いたのか慌てて口を閉じるジン。その口の端から垂れた涎を拭って再度問う。

「そ、それで……紫さんが、その事を明かした理由を、聞いても良いでしょうか？」

「偏に、信頼の為です。ジン君も黒ウサギ君も、それから子供たちも。善人である事は分かります。だからこそ、私も誠実に臨みたいと思っただんです」

「ッ、で、ですが！紫さんもご存知の通り、〴〵ネーム〴〵は風前の灯火の様なコミュニケーションです。神霊同然の力を振るえる貴方なら、もつといい場所を提示するコミュニケーションも多々あると思いますけど……」

「そこは、単に私の我儘ですよ」

「わ、我儘？」

「はい。今ここで、君たちを見捨てたくない。そんな我儘。憐憫、同情その他諸々。安っぽい心傷ではありますが、動くにはそれだけでいい」

一晩考えた結論。そもそも、ここまで踏み込んで見捨てられるほど紫の心は冷え込んでいない。

これもまた、一つの贖罪の形。偽善だろうと何だろうと、今度こそは自身の心に従って彼は今日を生きると決めたのだから。

かくして、〴〵ネーム〴〵に一柱の神が顕現する事になる。

それが、蝶の羽搏きとなってしまうのかどうか。少なくとも、今はまだ誰も知らない。